

廿日市市遺族会

廿日市市遺族連合会のあゆみ

■創設当時の概況

本会は、昭和六十三年四月、廿日市町が市制施行によって廿日市市となり、旧町内の佐方、廿日市、平良、原、宮内、地御前の六支部遺族会は、佐伯郡遺族連合会より分離して廿日市市遺族連合会を結成発足した。

○当時の遺族数 六四一人

○当時の役員

会 長	木坂サト（廿日市支部長）
副 会 長	大江寛一（宮内支部長）
婦 人 部 長	岡田久代（平良支部長）
青壮年部長	橋本直
理 事	上野勝（佐方支部長）
理 事	滝本貞子（廿日市支部長）
理 事	山根澄子（佐方支部婦人部長）
理 事	吉田フミ子（廿日市支部婦人部長）
理 事	河野マツ子（平良支部婦人部長）
理 事	鳥胤ムツ子（原支部婦人部長）
理 事	竹田静代（宮内支部婦人部長）

理 事	梶上久子（地御前支部婦人部長）
監 事	中川辰美（地御前支部婦人部長）
監 事	中谷覚（原支部長）
事務局	谷峰清子
会 計	

■廿日市市遺族連合会会員調査表

支部名	英霊拝数	遺族数	婦人部数	青壮年部数	県会員数
佐 方	七九	五七	一二	一四	一八
廿日市	一四九	一〇五	三三	八	三三
平 良	一七一	一三二	二五	二五	四二
原	六五	三二	九	七	九
宮 内	一六三	一二八	三〇	二五	四一
地御前	一七六	一五七	二八	二六	三六

■年中行事の概要

1 会費の徴収方法及類

毎年度当初に各支部内の地域班長が会員より徴収する。

正 会 員 二、五〇〇円 内五〇〇円は支部運営費

准 会 員 五〇〇円 全額支部運営費

青壮年部費 一、三〇〇円

市の助成金 六〇〇、〇〇〇円

2 英霊顕彰について

戦没者追悼式の挙行。

支部慰霊碑及び招魂社の巡拝。



廿日市市戦没者追悼式



岡山護国神社参拝……研修会
(H 4 . 7)



慰霊祭……研修会
於広島護国神社
(H 5 ・ 2 ・ 23)



平成四年三月各地区慰霊碑巡拝
(地御前地区)

平成四年三月各地区慰靈碑巡拝
(廿日市地区)



平成四年各地区慰靈碑巡拝
(宮内地区)



平成四年各地区慰靈碑巡拝
(原地区)

平成四年各地区慰靈碑巡拝
(平良地区)

広島護国神社社頭において慰霊祭を挙行し併せて遺族大会を行う。

支部主催で支部ごとに慰霊祭又は追悼法要を営む。

その他、政府及県の実施による戦没者追悼式、遺骨収集、戦跡の巡拝、近県の護国神社参拝等可能な限り参加実施する。

■その他（慰霊碑等）

支部 別 建立年月

廿日市 招魂社 昭和十四年

忠誠碑 大正十年十月

平 良 慰霊碑 （再建）昭和四十四年九月

原 慰霊碑 昭和二十九年三月

宮 内 慰霊碑 昭和五十四年八月

地御前 慰霊碑 昭和三十年三月

佐方支部の御霊は、廿日市招魂社に合祀、この招魂社は廿日市招魂社崇敬会（廿日市、佐方遺族会、軍恩連盟廿日市分会、廿日市市傷病軍人会で組織する）が護持する

又忠誠碑は、招魂社建立当時に桂公園より社の境内に移設した、ちなみに碑文は東郷平八郎書である。

五十年の思い出

廿日市市遺族会 岡田久代

あれから五十年、一口に五十年と申しますが随分長い茨の道の連続でございました。静かに振り返ってみます時戦争後の世相は混沌として乱れ厳しい情勢の下で未亡人にすら国から何の援助もありませんでした。

私達はあの大海に浮ぶ母と子の小舟のように行方も知れずにさ迷っていたのでございます。そんな時遺族会が発足され暗夜に燈を見出したかのように急に輝き嬉しくて力強く思ったものでございました。当時会長さんを中心に幹部の方々そして会員の共々幾多の困難も克服して互に励まし助け合って参りました。その時私は一才と四才の娘を連れて戦争に勝つまではと、その言葉に励まされて日夜頑張り続けて参りました。三反位の農業をし乍ら、和裁、洋裁、編物等あの頃が走馬燈の様にかけ巡ります。或る時は牛のた綱を持って耕している時急に牛が走って恐しかった事等今も忘れる事は出来ません。当時一才と四才の娘達も入学、卒業と父なき家庭でも明るく健やかに卒業しましたけれ共その間自分で出来る事等何でもしました。先づ山羊を飼いました。草刈りを毎日の様にし麦は農家ですからありますので山羊に食べさせて山羊乳を買って貰っては小使いをつくりました。又農業も手伝ってくれました。勉強しなければならぬ子供達も大変だったと思います。時代とは言え良く手伝ったと思う。或る日町長さんが佐伯郡の郡役所に勤めて見ないかと言われお世話して下さいました。それからは農業を続け乍ら毎日事務の勉強をしました。何をしましても時間がかかり朝は朝星夜は夜星で毎日無我夢中でござい

ました。一番悲しく思った事は子供達の就職の問題でした。或銀行に受けましたところが学科は優秀なのに母子家庭と言うので急に話がかわり落されました。こんな事があって良いのだろうかと幾日もいく日も泣き明しました。当時は私だけではなく他の母子家庭と共に同じ苦しみを抱き悲しみました。この事を会長さんが聞かれ代表者の方々と県知事さんに相談とお願いせられましたら、県知事さんもこんな事があってはならないと自ら身元保証人となられ親代りとなって下さいました。それから母子家庭の子供に差別がなくなりました。私は間に合いませんでした。けれ共地元の組合長さんが聞かれ長女は地元の農協へ勤める事になりました。次女も地元の保育所に勤めさせて頂きましたので深く感謝しています。私は池坊教授資格を頂き、早速に郡役所の会議室を休みの時使わせて貰い教室を開きましたので楽しい教室でした。私も三十年近く役所勤めをしました。月日の立つのは早いもので何時の間にか長女も次女も結婚しました。今では若い日の思出の一つとなりました。

偉大な組織の力により明け暮れ国からの援助を頂き感謝いたします。何時しか四季を重ね二人の娘も五十路の坂を越えました。現在では孫五人、曾孫四人達に見守れ毎日のようにお花教室、お茶教室と充日した日々でございます。何時も感謝と希望と勇気を忘れず益々一致協力して行かねばと思っている昨今でございます。

今年は亡夫の五十回忌に相当りますので有縁の者が集り法要を営む予定で心の準備中で一杯でございます。

最後に長い様な夢のような五十年と言う節目を記念として元気で今日のある事に感謝し拙い思出を閉じさせて頂きます。

世の波の荒きを越えて八十路静けき

出征した主人は返らなかった

廿日市市平良地区遺族会 河野 マツコ

夫に赤紙が来たのは昭和十六年九月中頃であった。大東亜戦争の始まる直前であった為か大勢の見送りもなく内密に家族だけで電停迄送って行った。背広姿で電車の最後尾に立ち停留所の私達を喰い入るのうに見つめていた姿が今でも私の臉にやきついていて。当時家業は材木屋だったので文字通り大黒柱を取られ後には老父母と二十九才の私と三才半と一才半の二人の子供が残され、まるで大海に擢(カイ)を失った小舟のような心細い有様で途方に暮れたものである。我が家は夫と弟二人合計三人がお国に召され両親の心中は如何ばかりであったろうと、戦争が終って見ればどこへ怒りをぶっつけて良いのか腹立たしい限りである。十月十二日に夫達の部隊が輸送船に乗る事がわかり私は長男を背負って皆実町辺りから宇品港迄夫達の行軍と一緒に歩いた。部隊の行先は台湾で三ヶ月訓練を受け比島へ渡ると言う噂であった。

間もなく私は二人の子供を連れて実家へ帰り郷里の農協の事務所へ就職した。そして終戦の翌年三月子供達が学令に達したので廿日市へ帰った。

終戦になって戦地からボツボツ帰還兵が帰って来るのに、待っても待っても夫は帰って来なかった。比島から帰ったと言う話を聞く度に西に走り東に訪ねて行ったが、結局何もわからず徒らに失望を重ねるばかりであった。父親の居ない淋しい日々を過ごす内に二十三年になって廿年の五月に比島マライバライで戦死と言う公報が入った。一度で好いから

成長した子供達を夫に見てもらいたかった。戦時中の物資不足は国民全部が「欲しがりません勝つ迄は」の合言葉で皆愚痴一つ洩らさず不自由な生活を強いられた訳で、今更くり返しても仕方のない事と諦めていたけれど、子供達から父親を奪い取った戦争が憎い。戦争が終ったからお父ちゃんが帰ると一生懸命待っていた子供達の心情が哀れでならない。

夫の戦死を悲しんでばかりもいられない。何とかお金の入る手段を講じなければならぬと色々内職をした。動力ミシンで蚊帳を縫ったり箸箱の絵付けをしたり和服の仕立てをやったり等したが、子供達も中学高校へと進学する様になったので広島市内の商會社へ就職した。その内夫の両親はあいついで亡くなり親子三人の生活が始まり、長女は高校卒業後広島のカス会社へ就職し長男は一年おくれて東京の大学へ入学した。終戦から五十年漸く暗いトンネルからぬけ出た思いである。

祖国の勝利を願う若い命を戦場に散らした多くの戦死者の為に細川総理にお願いしたい。どうぞ靖国神社へ参拝して戴きたい。国民に感謝されてこそ戦死者達は浮ばれるのではないだろうか。

読み返して見ると会からお達しの基本構想にほど遠く我が家の追憶になってしまいました。免に角与えられた境遇に一生懸命たえて来ただけの事でした。

平和を願う心

廿日市市 田川 昭代

昭和20年6月20日、この日は父が沖繩にて玉碎した日です。

終戦の日の8月15日が過ぎ、帰還兵が徐々に帰って来られるのに、父は帰りません。沖繩の激戦は当時余り詳しくは知らないので家族で待ちました。公報が入ったのは二年後の22年の8月でした。県庁に父の骨箱を受取りに行きました。骨箱の中にポツンと一つの位牌が入っているだけでした。それを見て始めて父の死が実感として湧き涙が出ました。

他人にも好かれ、家でも特に私にやさしかった父を思い出し母と家に帰った事は忘れる事が出来ません。

当時は少しの田・畑が有り、祖母・母・私の三大家族で、隣りに叔父の家族（叔母と五人の従兄弟達）が住んでおり、その後叔父は中支より、帰還して来ましたので、淋しさは薄らいで行った事を覚えています。

叔父と母は、出征前に父が勤めていた工場にて、働かせて貰い現金収入は有りましたので貧しい中、どうか生活が出来ました。けれども私の小さい時からの夢で有った専門学校に行き教師になりたいとの思いは、断念しました。奨学資金をと担任の先生より勧められましたがそれだけでは学資は足りません。工場通いと合間の農作業にと苦勞をしている母を知りつくしているだけに、ゆとりの無い事は良く知っています。母と二人でとても残念に思った事は今でも鮮明に思い出します。

昭和20年8月6日の広島市に投下された原爆の事も忘れる事の出来ない思い出です。

当時、平良国民学校の六年生だった私も、学校に收容された多くの被災者の救護を七日間、手伝いました。もう死んでいる赤ちゃんを腕から、放そうとしない母親や、火傷に沸いたウジ虫を取って貰う人達等、悲惨な光景でした。原爆で死亡した人達も父と同じ憐れでならず又、残った子供達も、私たちと同じ苦勞をして来た事でしよう。特に原爆の後遺症

を恐れて結婚等の差別に合った若者も多くいました。

救援活動の中で私が体験した事の重さは、生命の尊さと、心から平和を願う心を養いました。

敗戦国の日本国民は、どうしても悲しい戦争の体験を忘れる事は出来ません。戦争は、人間がするものですから、人の心に平和を植え付けなければ、この世界から戦争を追放することは出来ません。

私達女性には生命を生み育てる母親ですから特に全世界の人に、「戦争のない平和を」と心から願わずには居られません。

フィリピン慰霊

友好親善訪問団参加報告

廿日市遺族会 重

禮次郎

平成六年一月十四日午後、東京九段会館に参加者一行七十三名が集合し、結団式、靖国神社昇殿参拝、記念撮影等を済ませ、身の引き締まる思いで一泊。翌日、成田発空路マニラへ十三時四十分着。貸切バスにてホテルへ、途中、車窓から見えるマニラ湾の景色に、過ぎし日、亡き父達は如何なる気持を抱き、輸送船から上陸したであろうかと想いを馳せる。翌一月十六日から、戦没地に応じて、「A班ルソン島中部、B班ルソン島北部、C班レイテ島」と三班に別れて三泊四日の日程により各慰霊地を巡る。

私はB班として、十六日朝ホテルを出発、激戦地のタルラック、シーソン、ロザリオ、そして輸送船団沈没による多くの海上戦死者が出たリング

エン湾に面したアゴー。―対戦当時山下将軍司令本部が置かれていた為に猛烈な砲爆撃を受け、戦車車両の大部分を失った大激戦地とは思われぬ。―氣候風土に恵まれ、フィリピンの軽井沢と言われ、松が美しく繁る別荘地のバギオ。―食糧を確保すべく、サンタフェからソラノまで延々と続く広大な穀倉地帯を死守すべく、日本軍が凄惨奇烈な陣地戦を展開し、米軍指令官が戦死するまで互格に戦った大激戦地バレット峠、アリタオ。方面軍主力が復廊陣地に抛り、最後の抗戦中になったキャンガン。

私の父が山中で戦没したイチアゲの連山に向かって、三度、お父さんと呼んだオリオン峠。山下将軍が、降伏調印した小学校に近いサンミゲルと言った順で、追悼慰霊巡拝を行った。各地では全員協力して祭壇を設置し、関係者は、故人の好みであった酒、煙草、お菓子等、故里から持参した物をお供し、ありし日の故人の姿をしのびつつ合掌し、追悼文による涙、又涙の語りかけ。全員での焼香と、「ふるさと」を合唱、献花による心からなる追悼慰霊の誠を捧げる共に、恒久平和を誓ったことは、遺児の心に感動を写え、これからの人生に大きな支えとなる意義深いものであった。又、財団法人オイスカ産業開発協力が実施する、「子供ノ森」計画に参加、バギオの郊外近くのサンアントニオ小学校を訪問、先生に日本人形を贈呈、そして生徒にスポーツ用品とボールペンを一人一人に手渡して、生徒と一緒に苗木を植樹し、緑を守ることの大切さを共に感じ、現地の方とも友好を深め、親善の目的を果たすことができた。子供達の澄みきった瞳、清らかな微笑が今も目に浮かぶ。

一月十九日にマニラに帰り、翌日二十日、ルソン島南部のカリヤヤにて合同慰霊祭に参加。マニラ駐在大使、次官等、来賓の出席を得て、各県遺族会から捧げられた花輪に囲まれた祭壇に拝礼し、国家斉唱及び四

十九万八千六百余柱（内広島県出身一万七千柱）の英霊に対して感謝の黙祷を捧げ、遺児一人一人が、県代表として献花の後、「海ゆかば」を斉唱し、全員が拝礼して、新たに平和を願い、追悼の誠を捧げ、全ての日程を終えた。

父達の眠るルソン島北部各地を巡拝し、心ゆくまで供養を行うことができたことに感謝し、翌日二十一日、澄み切った青空からマニラを眼下に見て、平和の礎となった戦没者に合掌し、遺児として誇りを持って生きてゆくことを心に誓い、空路成田へ参加者全員、無事帰着、一週間の全日程を終えた。

追悼文

お父さん禮次郎ですよ。永い間遠い異国で一人ぼっちで眠り、さぞ淋しかったことでしょうね。

お父さんが眠るイチアゲの連山が遠く見えるオリオン峠の大地を踏みしめ、感無量です。涙がとめどもなく出て止まりません。遠く彼方に見える山中で、飢えと悪性マラリヤで苦しみ乍ら、家族から一滴の水も貰えずに、そして家族に残す言葉の一言も言えず死んで行ったお父さん、さぞ無念であったことでしょう。生存中よく吸った煙草と、お茶菓子代りとした好物の黒砂糖を持って来ましたよ。祭壇に向かい合掌すると、お父さんと別れて五十一年、今やっとお逢い出来た感動で胸がつまり、涙声でお父さんと呼びましたが聞こえましたか。冬の寒い日、野原で遊んで家に帰ると、私の冷えた身体を丹前の中に入れて、小さな手を大きな手で包み、暖めてくれましたね。幼い頃の懐かしい思い出の一つですよ。母（カツヨ）も満九十才の高齢で元気です。貴方と苦楽を共にした

昔日を思い出しては私に語りかけるのを唯一の生きがいとして、残された余生を暮らしています。

孫の由加利も増東家に嫁ぎ三十才になりました。曾孫の孝文も一才三ヶ月です。今が可愛いさかりで、貴方の写真を見せると、「じいちゃん」と言い、墓参りに行くと、「じいちゃん」と言って掌を合わせ、「アンア」と言って頭を下げますよ。妻（玲子）も仏壇の貴方に、毎日欠かさずお経をあげてくれます。日本の国もお父さん達のお陰で経済大国として発展し、街には商品がマーケットにあふれて、何ひとつ不自由のない幸せな日を送っています。広島もあの原爆投下の廃墟から立ち直り、美しい川のある平和都市として、立派に復興しました。

お父さん達の死は決して無駄ではなかったのですよ。オリオン峠の小石と土をお父さんの御霊として持ち帰り、故国を出兵する数日間、貴方と母が散歩した、想い出の海が見える、江波山の麓の貴方の墓に埋めます。亡き兄もこれからは、何時もお父さんと一緒にさぞうれしいことでしょう。もう淋しい思いはさせませんよ。お父さんの御霊（小石）が私と一緒に故国へ帰るのですから、これからは家族と四季折々の墓参には逢えるのですから、どうか安心して安らかに眠って下さい。

禮次郎も、平和の礎となった戦没者の遺児として、誇りを持って生きてゆきます。

追記

遠く彼方に見ゆるイチアゲの
連山に向いてお父さんと
三度呼べばオリオン峠に
三度帰ってくる父の声